

マスターズを彩るレジェンドたち(17)

2022年の年が明けた。新しい寅年はどのような年になるだろうか。新型コロナの解消が第一だが、簡単にはいかないだろう。全日本マスターズ陸上や各都道府県対抗駅伝は？ 早く元どおりの年にならないものか。ほぼ1年間続けたレジェンドの連載は今年もしばらくは続かせてもらわねば——。何はともあれ本年もよろしく願います。

写真／山田栄一郎さん、奥村留美子さん

山田栄一郎さん(82歳・長野) M80クラスで投てきのレジェンド

元高校の先生だった山田栄一郎さん(82歳・長野)は根っからの陸上投てきマンだ。1992年の52歳のときにマスターズ陸上の仲間入りをした。この年は円盤投(重さ1.5kg)38m28、やり投(同0.7kg)39m14がベスト記録。

M55クラスになると、走幅跳4m30、砲丸投(同6.0kg)9m32、円盤投(同1.5kg)は36m36と下がったが、この年56歳。

2003年の63歳で石川県であった第24回全日本マスターズ陸上のM60クラスに出て、円盤投41m19で1位、やり投38m59で6位に入賞した。ただし、この年のベストは円盤投42m54、ハンマー投40m89で全日本ランク各2位、やり投39m81の同7位となっている。さらに走幅跳では4m58の記録をもつ。

このほか大阪府での全日本マスターズ混成五種に出場し、総得点3385点で2位につけた。2001年、61歳で海

外遠征したオーストラリア・ブリスベンでは投てき五種に出て、3796点の日本新をマークし8位に入った。その後、65クラスになった65歳での投てき五種は3563点、混成五種も3967点で共に日本新を樹立した。

古希の70歳になった2010年に東京・国立競技場で開かれた第31回全日本マスターズ陸上では、M70クラスの円盤投で36m91のトップ。ハンマー投42m45で2位、やり投33m70の3位となった。

この年の第23回全国スポーツレクリエーション・マスターズ陸上では円盤投37m58で1位となり、マレーシアでの第16回アジアマスターズ陸上での円盤投35m94でアジアNo.1に。ハンマー投は41m76で2位、砲丸投が9m48の6位となった。

時は流れ2019年に群馬で行われた第40回記念国際・全日本マスターズ陸上では、M75クラスの円盤投(重さ1.0kg)28m08、ハンマー投(同4.0kg)29m85で各2位だった。2020年に傘寿の80歳となり、円盤投(同1.0kg)29m40、ハンマー投(同3.0kg)35m10とランク1位に。やり投(同0.4kg)でも24m51で1位と、投てき3種目でトップを占めた。

山田さんは、小学生の低学年時代は虚弱児だったが、中学生になり農作業に打ち込むうちに人並みの体になった。中3のときに校内クラス対抗駅伝で800mを完走したことで自信を持ち、陸上部に入る。周辺の農道で3～5kmを走りまくり、走ることの楽しさを覚えた。

長野市に近い須坂市の県立須坂高に

進学し、当初は中距離をしていたが、高2からはハンマー投、やり投をやるようになり、秋には北信地区高校陸上で両種目に入賞。高2の冬期練習は特に熱心に取り組んだ。冬は信州特有の積雪があり、山田さんは長靴を履いて1時間ほどかけて通学。授業が始まるまでの1時間、ハンマーを振った。

そのような練習が実って、高3の年2回ある北信地区高校陸上のハンマー投、やり投に優勝し、余勢を駆った同県高校陸上のハンマー投で1位になり、同年のインターハイ富山大会に駒を進めた。大会では予選が壁となったが、インターハイの雰囲気に入ることができた。

高校を卒業して教師の道を選び信州大教育学部に入學。虚弱児だった山田さんが丈夫な体になり、ハンマーまで振れるようになったことで「トレーニング次第で人間の体は変わる」と身をもって体験したことから、教育の道に進んだ。「子どもたちに健康で丈夫な体に育ってほしい」という思いからだ。

信州大時代は関東甲信越国立大陸上に円盤投、ハンマー投に2連勝したが、インカレには出ていない。1963年に県内高校教諭となり、新任高校へ赴任。豪雪地の高校であったため、生徒からクロスカントリースキーの手ほどきを受け、2年目には青森国体の教員の部に出て入賞した。

「生徒に“健康になれ”と教える以上、自分も健康づくりの実践活動を」と、国体教員の部のクロカン・スキー、および秋の国体の円盤投に3年間参加。通算するとクロカン・スキーの国体に



カナダで2005年7月30日に開催されたワールドマスターズゲーム、M65五種競技のときの写真。中央が3730点で優勝した山田さん。

は「13回ほど出場。最後は49歳で15分台で滑り、若年者に混じって中位の順位でゴールした」の思い出だ。

海外の大会では62歳でのメルボルン、65歳のエドモントン、69歳・シドニーの五種競技で3連勝。75歳の投てき五種で3855点、混成五種に3786点の日本新を出したことなどが思い出として残る。

これからはM80クラスでの記録向上と、スキーもベテランの域を目指す。普段は米づくり、柿やりんごの木の話に精を出し、週1度はジムでトレーニングに励む。

「健康とはいいいもんだ！」(高笑い)。

奥村留美子さん(61歳・滋賀)
「楽しいから走る」と
中距離に連続出場

マスターズ陸上の中長距でおなじみの奥村留美子さん(61歳・滋賀)。2016年の第37回全日本マスターズ新潟大会ではW55・800mで6位、翌17年の第38回国際・全日本和歌山大会のW55・800mは4位、また18年の第39回全日本鳥取大会ではW55・800mの6位と、いずれの大会も最下位でゴールしている。

2019年の第40回記念国際・全日本群馬大会はW55の800mで14人が出場、奥村さんは着外だった。ご本人は「何番だったのかなあ。ひょっとすると、最下位だった？」とはっきり覚えていないそうだ。着順とは別に連続出場などの^{かど}廉で“努力賞”を受賞した。

奥村さんにとってレースの着順などは関係ないのだ。ただひたすら「楽しいから走る」それだけなのである。それではマスターズ陸上に入会する以前は――。

奥村さんは、高校生のとき陸上界のアイドルだった。地元・甲賀市の水口東高で陸上部だった奥村さんは旧姓・脇畑。高2の1977(昭和52)年の第30回岡山インターハイの女子800mに2分10秒9で全国のトップに立つと、高3の78年第31回福島大会では同種目で2分10秒3で2連覇を達成。

甲賀市で生まれ育った奥村さんは活発な少女だった。すぐ上の兄の後を追っかけたり、走ったり、跳んだり。小学生時代は小1～小6まで校内マラソンで負けなし。マラソンを通じて「私は長距離向きなんだ」と自覚した。

だが、中学校に進み陸上部に入ったが、練習には熱心でなかった。あるとき、陸上部以外のスポーツをしている生徒に「負けた」形となり、先生に「なっとらん」と声をかけられた。かちんときた奥村さんは、それから心を入れかえて練習に励んだ。特に中2の冬期練習には力を入れた。

ただ奥村さんの中学時代はケガの連続だった。中3のときに第2回全日本中学陸上選手権の共通800mに出て、2位と同タイムの2分15秒9の中学新で3位に。だが奥村さん自身は「絶対に1位を」と思っていたので、悔し涙を流した。「直前まで痛めていた脚を我慢して走ったのに」

水口中から水口東高に進んだ奥村さんは、1年生まで脚のケガに悩まされ、インターハイに出たものの準決勝どまり。氣遣った先生がゴールの所まで駆けつけてくれた。以後は脚のケガが回復し、順調に練習ができた。「よ～し、これなら」と迎えたのが、高2の1977(昭和52)年の岡山インターハイ。

後半勝負に出て初の全国一に輝いた。「初めての全国大会優勝ですから、最も印象に残るレースです」。インターハイで弾みをつけた後は好調で、この年は日本選手権の800mは4位だったが、1500mは4分29秒7で優勝し、国体の800mをも制した。また、ジュニアオリンピックの1500mまで勝って、日の出の勢いを示した。

好調さは翌高3のときも続いた。福島インターハイで勝ち、2連覇を成し遂げた。「高2の冬はインターハイのタイトルは守らないとダメと、納得のいくまで練習しました」の執念が通じた形だ。日本選手権も800mで2分11秒6で勝ち、1500mは4分28秒3の高校新でV2。国体でも32回大会に

続き、少年A800mで優勝した。

翌年の1797(昭和54)年に大体大に進み、初のインカレで800m2分13秒5、1500m4分44秒8と二冠を獲得した。国体も成年共通800mに2分09秒5で通算すると3連覇だ。ここまではよかったが、2年生からは再び脚の故障続きで、毎日泣く日が続いた。競技会で姿を見せない彼女に「脇畑はどこに消えた」の声か――。

この間、奥村さんの胸の内を知った陸上部顧問の豊岡示朗氏は陰で支えた。奥村さんは感謝の念を今も抱いている。「あれだけ期待されながら裏切ってしまった私を支えてくださり、卒業させてもらった。ありがたいことです」。奥村さんは無事卒業すると思いきや、中学校の体育教諭になった。

体育の先生をしているうち、30代半ばにさしかかったとき「何かやってみたい」と思った矢先、「そうだ、マスターズがある。好きな走ることだし」と入会。以後は全日本マスターズ大会には15年連続の出場を果たしている。定番の“最下位”には教師時代に奈良国体の5000mでのほろ苦い思い出がある。このとき、2周遅れのゴールとなり、大拍手のなかでゴールした。

現在は教師時代の延長で健康体操を地域の人に教え喜ばれている。W60クラスのマスターズ陸上は「これからも感謝の気持ちを忘れず走り続けます」。



高2の岡山インターハイ800mで全国初優勝した奥村留美子(旧姓・脇畑さん)さん。現在はマスターズと地域の方への体操指導に励んでいる